

特別寄稿

五つ星運動とイタリア民主主義の現在

— 最近の 2 つの選挙結果から —

すずき
鈴木

ようこ
庸子

●イタリア語通訳・翻訳家

はじめに

— 最近の 2 つの選挙結果 —

イタリア総選挙 2013年 2月24・25日

- | | | |
|-----------|----------|------------------------------|
| 上院（定数315） | ・ 中道左派連合 | 123議席（31.6%） |
| | ・ 中道右派連合 | 117議席（30.6%） |
| | ・ 五つ星運動 | 54議席（23.8%） |
| 下院（定数650） | ・ 中道左派連合 | 345議席（29.5%、ただし民主党のみでは25.4%） |
| | ・ 中道左派連合 | 125議席（29.1%） |
| | ・ 五つ星運動 | 109議席（25.5%、単独では第1位） |

○ポルティチ 五つ星運動 8,013票

【ポルティチは、カンパニア州ナポリ県のコムーネ（基礎的自治体）の1つ。イタリアで最高人口密度】

自治体選挙 2013年 5月26・27日 （決選投票 6月8・9日）

対象市町村数564（うち県庁所在地16）、有権者数約700万人

五つ星運動の市長候補当選者数 2

○ポルティチ 五つ星運動 市長候補2,190票（落選）

市議会議員リスト1,605票（当選者なし）

ーイタリア憲法第一条、「主権は国民に属する」の文字通りの実現のため、現存の縦型ではない、平らな共同体型民主主義を目指す。そのために、現存の権力中枢システムを一新し、新たな社会構造基盤として、透明性が高く、個々人が直接アクセスできるインターネットを据えるー

1980年代に風刺の舌で一世を風靡し、その予先を当時の絶対勢力に定めたが故に人気絶頂期にメディアから追われた、カリスマティックなトークの達人ベッペ・グリッロ。彼が2005年におこしたブログサイトwww.beppegrillo.itを活動拠点に、五つ星運動（MoVimento 5 Stelle、以下M5S）を立ち上げたのは、2009年であった。このサイトと、M5Sのオフィシャルサイトwww.movimentocinquestelle.it、そして公共のオープンスペースで行われるグリッロならではのワンマンショー＝政治集会ツアー（今年の総選挙向けは題して「津波ツアー Tsunami Tour」、自治体選挙向けはその延長で「みんな（註：既成政党、政治家）お家に帰んな！ Tutti a Casa!」）という直接方式にコミュニケーションを限定し、「右でも左でもない。我々は前だ」というスローガンにより既成政党との差異、独自性を強調した。メディアへの不信・不参加を明言し、自治体選挙開票まで、メンバーの殆どがこれを厳守してきた。

政党は不要とし、通常の党規約（Statuto）の代わりに「非規約（Non-Statuto）」において、この運動は「政党ではなく、将来政党を目指すものでもない」と定義している。実際の活動は、manifestoの代わりに、M5S登録者（イタリア国籍を有し、他の政党に所属していない成人であることが条件）からネットを通して寄せられる提案を逐次練った、国と国民、エネルギー、情報、経済、運輸、保健、教育の7カテゴリーからなる「プ



ボルティチ繁華街の広場でのM5S政治集会にて
市民（左）と談論する市議会議員候補者（右）

ログラム（Programma）」の実現に向けられる。

なお、グリッロのサイトは、ウェブマーケティング・コンサルティングの企業家、ジャンロベルト・カザレツジョとの出会いによって生まれたもので、これとM5S本部のサイト運営はカザレツジョの会社が担当しており、非規約も2人の合作である。グリッロとは反対に殆ど表に出ず、業界関係者以外には無名だったこの人物が、実はM5Sの指針とあり方をグリッロとともに握る陰のリーダーであるとの見方が定着している。

創設者（の1人）にしてフロントマンのグリッロが放つ圧倒的な存在感とは裏腹に、どこかつかみどころのないM5Sはこの2月、中道左派の圧勝が確実視されていた総選挙で、あらゆる下馬評を裏切り、真の勝者として国政の第一線に躍り出た。ただし初産で163人ももの新人国会議員の母となったグリッロ自身（及びカザレツジョ）は、立候補すらしておらず（M5Sの内規で、有罪判決を受けた者は立候補できない。グリッロは人身事故でこれを受けた過去がある）、国内三大党派の

一つの絶対的なリーダーになるも、自らの発言は常に議会の外からという位置をとり続けている。

このM5Sの跳躍は社会現象とみなされ、「既存の政党、権力中枢への抗議」「反政治」「出口の見えない構造的な不況の一番の犠牲者である若者、非正規労働者、失業者等の代弁者」の票と分析された。

ところがその僅か3カ月後の自治体選挙では、彼らにとって惨憺たる結果が記録された。これは、5月後半まで党（運動）支持率20～25%という数字を安定してはじき出していた様々なアンケート調査からも、遠く離れたものである。また、このM5Sの惨敗が、国政の自由国民党、地方に強い民主党というこの20年来の政治傾向を、より顕著にさせてしまったという皮肉なおまけまでついた。

ここでは、イタリアの政治システムと現実には照らしながら、M5Sの特徴が各々の選挙で意味したものを考察し、これと、両選挙で有権者が判断材料としたと思われる事象を合わせ、わずかな期間に記録した得票差と、M5Sの現時点での意味をさぐる。なお、自治体選挙の実例として、イタリアで最も人口密度の高いポルティチ（ナポリに隣接。有権者数47,485人）を取り上げる。

M5Sの特徴

① 既成政治体制への攻撃

イタリアの市長選と市議会選挙は、国会と同じく5年毎に、市長候補者が自らの市議会議員候補のリストを立てた、市長・市議会議員連立型で戦われる。そのため、市長＝市議会与党の党首となるのが普通である。なお議員は、人口1,500人以上の自治体の場合、多数派プレミアム制に比例代表を加味した制度で選出される。

イタリアの自治体の平均人口は約7,000人と小さく、100万人前後またはそれ以上の市は片手に

も満たない。小さな現実に対処する各々の市役所の役目は、市長の意向の実現に重きがおかれ、チェック機構としての機能は弱い。経営能力のある管理人を必要とする市町村レベルでは、体制は問われず、M5Sの訴えは空回りした。

一方、国政選挙では、失業率にも企業倒産数にも歯止めをかけられないどころか、モンティ内閣の超緊縮・絞めつけ政策がこれに一層の拍車をかけた政治責任と、金銭をはじめ各種スキャンダル作りにいとまがない政治家達への抗議を表明し、その方向を変える新リーダー、または方向転換させる圧力となる存在を求めた。権力システムの一掃をうたうM5Sは、これにうってつけであった。

② 無名の候補者—リアルとバーチャルの距離—

国政レベル〈上院：比例代表選挙 下院：多数派プレミアム制度付き比例代表選挙〉では、候補者はまず党として判断される、バーチャルな存在である。一方、自治体における候補者が個人として問われる直接選挙では、無名の人物は存在しないに等しい。

ポルティチのM5Sは、他政党が選挙期間限定の臨時事務所を町中心部の一階に借り上げ、後は週末小さな集会を開く程度の活動にとどまったのに比べ、選挙期間中におおよそ2日に1回のペースで、精力的に何らかの演説・集会をオープンスペースで開いた唯一のグループであった。地方誌・ニュースにも、脅威のニューエントリーとして頻繁に取り上げられた。しかし、市長候補（システムエンジニア）、議員候補リストとも、各々得票率6.79%、5.15%と予想外の惨敗を喫した。

俗に地方選挙で有利なのは、ホームドクター、会計士、弁護士らと言われる。いずれも我々がデリケートなプライベートをさらす相手である。問題があるごとに相談に乗ってもらふ知人と、正しく美しいスローガンや公約をウェブ、チラシ、広

場で訴える、良く知らない一市民。その距離感の差は、票までの距離と比例しよう。ポルティチのM5S議員候補で最も票を集めた（203票）のは、32歳の女性弁護士である。一方、既成政党から市議会議員に立候補したあるホームドクターは、選挙活動期間中も自らのオフィスに詰め、選挙運動らしい動きは一切見せなかったにもかかわらず、難なく304票を集めたが、これは当然のこととして受け止められている。また、M5S議員候補中最も得票数が少なかった（13票）のは、フェイスブック世代の26歳。グリーンピース他環境保護団体の活動にも積極的に参加する、農学部森林保護専攻の彼は、「親族の半数」と自らの初選挙の結果に苦笑いしていた。ウェブを信仰するM5Sの候補者の、無限に広がるバーチャルなお友達は、地方選という地理的にも限定されたリアルな場所では、容易に蒸発してしまうのである。

③ ヒエラルキーの不存在

M5S（国政）とその支部（地方政治）の関係はあくまでフラットであり、各々が独立している。この全員が同じ権利を持つ組織形態では、コンセンサスや意思の統一は難しく、また各々の結び付きも弱い。

またフラットという前提はあるにせよ、実質上グリッロという教祖を中心とした国政に対し、絶対的なリーダーを持たない地方レベルの核は、内部／外部に対する求心力に欠ける。

ポルティチのM5Sはここ数年、砂浜の清掃、海水浴場の独自の水質検査、商店街再開発に向けたアンケート実施等の活動を続けている。しかし、国政の1／5にとどまった市議会議員リストの得票数を見れば、議会という土俵の外の運動は、政治的なコンセンサスには結び付いていないことが明らかである。



ポルティチのM5S全（左上が市長、他は市議会議員）候補者の顔写真とプロフィールを載せたチラシ裏には、ゴミの削減、海岸・漁港・観光・漁業の全視点に立った海の有効利用等10のプログラム（マニフェスト）が記載されている

3 カ月で何が変わったのか

2月、イタリア国民はグリッロに「国会にてお手並み拝見」と期待を表明した。3カ月というお試し期間を経て、民主主義の主権保持者たちが彼の運動に下した判断は、「与党としての特質に欠けた野党」であった。

この間、まずM5Sの「我々は右でも左でもない」「既存政党・政治家は全て泥棒」といううたい文句は、具体的には他党との没交渉を意味することが明らかになった。中道左派も中道右派も、独自には政権がたてられず、そのバランスの要がM5Sであるという絶妙の地位につきながら、ただただ「誰とも組まない」の一点張り。何ら解決策を出すでもない。この非生産的な姿勢は、最終的には彼らが最も敵視していた既存2大政党に、中道左派・右派連立政権という離れ業をとらせる引き金となった。既存2大政党に政府をプレゼントすると同時に、自らの戦力均衡の鍵としてのポジションも返上した。組閣のテーブルにもつけないままに、野党の一匹狼に転げ落ちてしまった。約2カ月もの事実上無政府状態を生み出し、あらゆる決定が先送りとなったことに関する責任も、グリッロは4月3日の「何でM5Sに投票したの？」と題したブログで、「古い政党といっしょに政府をつくらせるため？（中略）それはお門違い、残念でした。（中略）次回は（註：運動ではない）政党にどうぞ投票してください」と自らの支持者に転嫁した。

どこにも属さないがゆえに、彼らの法案は、左右両陣営から賛成を得られる可能性が高く、スムーズな法律施行の立役者としての役割も見込まれていた。他の政党にはできないこの役目を果たす姿は、総選挙後4カ月が経とうとしている今もまだ見られない。また、M5Sにとって正しい法案

であれば、派閥を問わず賛成する用意はあると表明はしていたが、その実証も同じである。

なお、「国境なき記者団によると、イタリアの報道の自由度は179カ国中57番目」だから、この国のジャーナリストは皆誰かの息がかかった「奴隷」という挑発は、海外メディアを除くインタビュー・対談の一切の拒否というマイナスの姿勢を通して実現された。

M5Sが2人の創始者の独裁体制下にあるという見方を始め、グリッロとその運動が様々な矛盾を抱えていることは、かなり早い時点でメディアが暗示しており、またサイトを読めば感じられたことである。それに気づきつつも2月、800万票が彼らに投じられたのは、あくまで民主主義の枠の中で、硬直したこの国の政治体制に彼らが風穴を開けることを、多くの国民が期待したからである。そのためには、グリッロ／M5Sが国会に上がる必要があったが、これは25%という驚異的な数字で実現された。この与党の一派となりうる世紀のチャンスをみすみす無駄にするという大失態は、運動にとって致命傷である。国政と自治体選挙の違いを差し引いても、5月の結果にもそれは明らかである。次回総選挙にも、この事実は確実に影響を与えるであろう。

ただ、この現象に全く見るべき点がないということではない。中道右派と中道左派が合体した現レッタ内閣は、グリッロが言う「既存政権は皆同じ穴のむじな」の体现であり、インパクトが売りの彼の一般論にも一理あることの実証である。また、国庫からの選挙経費（4,200万ユーロ）受理拒否や、選挙前に定めた独自のルールを守り、国会議員の給料を月額総額5千ユーロ＋経費に限定し、国庫への差額返済に関する法律がないため、今のところは銀行（Banca Etica）口座に、毎月M5S国会議員全員が全差額を振り込んでいることなど、称賛されるべき実績も多々ある。これに

関し「政党議員も我々の例に倣ってほしい」と言う、下院副議長を務める26歳のナポリ大学法学部生は、首都での生活費を抑えるため、他のM5S議員4人とアパートをシェアしている。若い理想主義者のストイシズムと揶揄することは容易だが、3年前、コロッセオを真向かいにした超高級マンションの購入・改修に関し、総額の約2/3にあたる110万ユーロを別人が支払っていたことが発覚したベルルスコーニ内閣の経済発展省大臣（その後辞任）が、「私が預かりすらぬところで、（購入・修復経費を）プレゼントしてくれたのかもしれない」ととぼけて見せたのとは、雲泥の差である。数えきれないだけ続いた政治家のスキャンダルがこのところ影を潜めているのも、玄人議員にとってはエイリアンのようなM5Sによる議会‘侵略’が、少なからず影響しているのではないだろうか。法律的な価値も拘束力もなく、国会議員の本来の任務とは別の領域ではあるが、このような倫理面では彼らの活動への評価は高い。また、地方に点在していた草の根運動を繋ぎ、その力をまとめて国政レベルまで引き上げた功績は、今後様々な分野で同じような動きを促す模範となろう。

終わりに

総選挙に向けた選挙活動以来、グリッロ／M5Sにメディアが触れない日はない。それは国民による注目度と期待の高さの現れでもある一方、それに比例した激しい批判ももたらす。それを無視

することは、民主主義では自ら土俵をおりたことを意味することを、身をもって学んだ彼らは、ここへきて変化の兆しを見せ始めている。例えば5月の選挙後間もなく、グリッロがブログや政治集会の場でジャーナリストへの攻撃を強める一方、厳選されたM5S国会議員による政治番組出演が始まった（トークショーにもかかわらず、他の出演者とは別個に、司会者と一対一の対談という出演条件をつける等、スムーズなものではないが）。

M5Sという異物を一度に大量に取り込まれた国会は、前代未聞の左右中道連立政権の誕生を始めとするショック反応を示した。M5Sはここで力尽き、何の痕跡も残さず忘れ去られるのか。あるいは、政治の勢力均衡に影響を与えう一翼となり、組閣後も明かりが見えないこの国の政治・社会に変化をもたらすのか。

5月の惨敗後、M5Sの支持率は、緩やかに下がりながら20%前後というアンケート結果が出ている。アンケートシステム自体信用が地に落ちた感はあるが、相変わらず潜在的な得票率があることは確かであり、他党にとって不気味な存在であり続けている。この数値が得票率に近づくのか、票とかけ離れたバーチャルなものに終始するのか、はたまたずるずると低下するのか。それはM5Sが方向性を修正しつつ、現時点では政治以外の畑でまいた種を、ゆるぎない政治グループとして、今後できるだけ早く国政／議会に反映させることができるか、それ次第である。

参考資料

A RIVEDER LE STELLE: www.beppegrillo.it, Rizzoli, 2010

www.beppegrillo.it

www.movimentocinquestelle.it

www.portici5stelle.it